



Mamoru Hirai

平井 守

平井木工挽物所 代表



万年筆をつくるようになって、仕事が楽しくなった

挽物～ひきもの～

平井さんの仕事場・平井木工挽物所。仕事場の引き戸を開くと、さまざまな形の木材と使い込まれた機械が目の前に広がる。右側にならぶ“ろくろ”の前が、平井さんの定位置だ。『木工挽物』とは、木材をろくろや旋盤でひき、椀や鉢、盆など円形のものをつくる技術またその製品のことをいう。木工挽物を営む工場は減少の一途をたどっている。平井さんは、そんな木工挽物の世界において、希少な熟練の技をもつ。

簡単にできるように見えるからこそ

カットした木材を“ろくろ”にセッティングする。“ろくろ”とともに回りだす木材。そこに平井さんが持つ“シャカ”という刃物の刃先があたると、木材が削られ、木の粉が舞い落ちる。あっという間に、ただの丸い棒状の木材が削られ、形づくられていく。その姿だけみると、誰でも簡単にできるように見える。空気を吸うように自然に、そして簡単に削る。自分の体の一部のように刃物をあやつり、手の感覚だけでつくり上げていく。けれど、一朝一夕でできることではない。簡単にできるように見えるのは、平井さんの技があっこそだ。



道具も手づくり

「刃物も自分でつくれないければ、一人前とは言えない。」削る技術だけでは仕事にならない。木材を削るための刃物は、平井さんのオリジナル。自分で刃物の原材料である鋼を、鍛冶屋さんのごとく、焼いて、叩いて、伸ばして、曲げる。「角度が難しい。ほんの少し刃物の角度が違うだけで、全然削れない。」と

Profile “世界にひとつだけ”をつくりだす匠の技

木工挽物職人として50年以上のキャリアをもつ平井木工挽物所 代表の平井守さん。伝統工法である“ろくろ”と自作の道具を用い、さまざまな素材を削る希少で高い技能を有する木工挽物の職人。万年筆やボールペンなどの平井木工挽物所オリジナルブランド「雲舟シリーズ」は、屋久杉や桜など日本の銘木をはじめ、紫檀・黒檀など様々な選りすぐりの銘木から、平井さんの手により1本ずつ丁寧に削りあげられる、あたたかみのある世界に1本の筆記具だ。培ってきた匠の技は2人のご子息に大切に引き継がれている。

所属企業 平井木工挽物所
〒544-0004 大阪市生野区巽北3丁目1-24 TEL/FAX:06-6752-3875
HP: <http://hirai-woodturner.com/>

平井さんは言う。

楽しい～世界にひとつだけの万年筆～

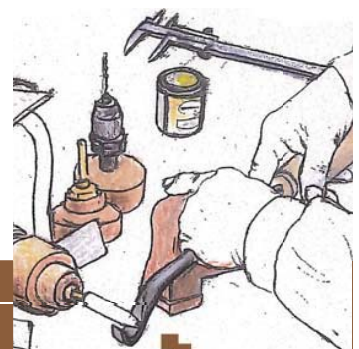
もともとは、傘の柄の部分をつくる下請けの仕事を中心にやっていた。時代の流れとともに、そういった仕事が減ってきた。20年ほど前に、本格的にオリジナルの万年筆をつくり始めた。屋久杉や桜、紫檀、黒檀、花梨などの銘木から、オリーブやパープルハートといった新しい木材また鹿の角まで、さまざまな種類の素材を用い、万年筆をつくり出す。平井さんの手によって浮かび上がってくる木目。同じ模様のもはひとつもない世界でただひとつの万年筆となる。「自分でつくるようになって、仕事が楽しくなった。」オリジナルの万年筆をつくり始めて、直接自分の技術が認められるという達成感をえた。



技をつなぐ

15才で大阪へ。木工挽物所を営む叔父の下、挽物の世界に飛び込んだ。叔父さんの急逝により23才で独立。そこから、がむしゃらに働いてきた。

「自分は何度も何度も失敗を繰り返しながら、一人試行錯誤しながらやってきた。けど、息子はすぐ「どうしたらいい?」と聞いてくる。」と、厳しい言葉とは裏腹に、笑いながら話す平井さんの仕事場には、今2人の息子さんが一緒に働いている。一人は技術を継ぎ、もう一人は営業・販売を担当する。平井さんのつくった万年筆は、ネットを通じても販売されているが、お客さんが実際に見て触れることのできる全国の百貨店の催事場から次々と声がかかる。「年末年始は、1日しか休みがない。大忙しですわ。」



大阪テクノマスターとは…大阪市内のものづくり企業で活躍する“ものづくり”のスペシャリスト。

問合せ先 ▶ 大阪市 経済戦略局産業振興部 〒559-0034 大阪市住之江区南港北 2-1-10 ATC ビル オズ棟南館 4 階 TEL:06-6615-3761 FAX:06-6614-0190